



1. 斎藤智也監督による最後のミーティング / 2. 先輩から後輩へ、夢を託す / 3. 3年生（57期生）が目標としていた「他喜力」 / 4. 感謝の気持ちを込めて最後の校歌を歌い、汗を流したグラウンドに一礼

「非常識を常識に変える力」

3月1日、市内の高校で卒業式が行われました。このうち聖光学院野球部では3年生を送る会が開かれました。前主将の内山蓮希うちやまれんきさんが「甲子園で試合がしたかった。でも、人生最大の逆境を最高の仲間、指導者と乗り越えられたことは甲子園に行くより価値があった。」と胸を張りました。斎藤智也監督は「甲子園がないという非常識。非常識を常識に変える能力を身につけ、人間的に成長できたお前らを誇りに思う。」と、はなむけの言葉を贈りました。

市長コラム



第31回 伊達市の魅力とは！

毎年春に東京から訪ねて来られる方が言っていました。「伊達市に来るときは必ず阿武急に乗ります。車窓に広がる桃源郷が私に何ものにも代えがたい時間を与えてくれます。この“ひと時”があるから伊達市を訪れたいのです」と。ここに生まれ育った者には当たり前と思っていたことも、都会から見ると“とても贅沢ぜいたくなもの”だということが初めてわかりました。

それ以降私は、「伊達市とはどんなところですか？」との問いに、「都会にないものが全てあるところですよ」と答えています。里山に囲まれ小川が流れ田畑が広がる。季節になると折々の花が咲き、美味しい野菜や果物がたくさん実る。唱歌「ふるさと」の世界が最も似合う場所だと改めて感じています。

また、人と人とのつながりが強いところも魅力です。人間関係が希薄になっている現代社会ですが、地域とのつながりがあるからこそ楽しいし、何かあった時に必ず助けてくれる安心感が伊達市にはあります。

でも、魅力はそれだけではありません。新幹線が止まる福島駅から近く、JRや阿武急などの鉄道があり、もうじき全線開通する相馬福島道路があります。交通事情にも恵まれている“ほどよい田舎”だと考えています。

今年、伊達市が誕生してから15年、東日本大震災から10年の節目にあたります。度重なる自然災害に見舞われながらも、伊達市として着実に歩みを進めてきた15年でありました。都会にはない自然や人とのつながりに加えて、新たな住宅団地や工業団地の造成、大型商業施設の誘致など、伊達市の未来に希望の光となる事業も着実に進んでいます。

豊かな自然の中で安心して暮らし、住んで良かったと思えるまちに、そして田舎であることを強みに誇りに思える“伊達市”にしていきたいと考えています。

須田博行